

あそ

3

2010





彊不息 保多孝三著『柞廬印存』(五) より



『易経』の「天行健 君子以彊不息」の一節。天行健は春夏秋冬が秩序正しく進むこと。彊不息は常に心を引き締めて全力を注ぐこと。この語彙

は昭和 37 年日展(左下)・柞廬印存 4(昭和 35 ~ 38)(右下)・柞廬印存 5(昭和 38 ~ 42) と近い間に三点刻されてゐる。

あを

三 月



春 信

本町三 佐藤喜孝

江戸地圖のうへを歩いて日脚伸ぶ
御手洗に泛けるほこりも日脚伸ぶ
酒くさい錦鯉くる冬の梅
草双紙唐梅に日のまはりきて
春信や舷を這ふ水の光

新 年

川崎・小田栄 木村茂登子

蒼穹に初富士芦ノ湖踏んまへて
凧一ツ二ツ三ツ欲し初御空
松の内一番静かなる二日
大虎が吼えて名無しの年賀状
神佛の神から参る初詣

嫁に映ゆ我若き日の春着かな
初夢にちちははも居り嬉しげに
薩摩御子女とてなみなみと年の酒
福寿草あちこち向いて咲きにけり
喰積の見事にはけて嬉しかり

白
金
齊藤裕子

建ちかけのスカイツリーの淑気かな
幼児の手旗信号初笑
ひと所に鯉揺蕩へり冬の池
ちちははの夢見たる朝寒卵
六十歳で嫁入りをする福寿草

京
橋
篠田純子

千駄木 芝 尚子

羽子板やあの頃いくさ始まりし
大亀の顔つくづくくと初詣
否応もなく正月の来てゐたり
寒の闇青き猫の目光りをり
小正月帯に折りぐせ結び癖

宝仙寺前 芝宮須磨子

輪の外で幸せたしかむお正月
初釜や装へる子をまぶしめり
初護摩会修する僧の声若し
日溜りによもやま話懐手
縦糸緯糸紡いで解きて年新た

初 日

銭湯の坐薬広告年迫り
魚やの白のゴム長クリスマス
ピン札が一枚混じる注連買ひに
初日待つ野づら積み石揺るぐなし
一竿が鴨居に掛かる雪籠り

つるぎもちひたして
剣地東出

定梶じよう

愛宕神社

江戸地図になき墜道や小正月
冬晴や愛宕神社に三角点
白梅のぼつりぼつりと愛宕山
梅白し出世階段一歩づつ
式を待つ花嫁御寮春隣

所 沢 須賀敏子

本町三丁目
鈴木多枝子

大寒の船も重たく動きをり
大寒の海は鈍色日航機
段畑の海に迫り出す水仙花
元旦や法螺貝ひびき護摩を焚く
鉦太鼓白足袋目立つ若き僧

浦和
竹内弘子

回復期らしきメールの来る余寒
煮こぼせる瓦斯の立消え春の風邪
ひかるもの唧へて飛べり春鴉
母に似し姉のもの言ひ青木の実
受験子のひろげし脚につまづきぬ

凜として

田 端 田中藤穂

遠い地鳴り大寒の夜の口乾く
飛び立ちし物を愛せり冬の草
友の病む心細さよ枯木星
浮雲や枯葦に日の照り渡る
凜として今日を暮さむ冬木の芽

三 光 坂 東 亜 未

一病の息災称へ年惜む
鶴五角亀の六角初茶の湯
鶏旦や古家に嬉し墨の勢
大寒を揺るがさむとて「ねぶた」の来
冬うらら勘亭流に待ち合す

親 睦

千両や米寿の話實多し
冬うらら老の折紙たどどし
輪唱のやつと成り立ち水仙花
直球の鈴鹿嵐に晝雨戸
懐炉貼る身の軽く動く楽しさ

富田長崎桂子

工事場の初仕事らしシヨベルカー
裸木となりて落着く櫟大樹
土埃挙げて飛び立つ寒雀
屋根の霜けふ一日のはじまれる
竹林を自在に走る恋の猫

大宮早崎泰江

老いくらべ泣き顔に似て初笑ひ
四谷から歩いて帰る春の風邪
鯛焼が食べたくなつて春の雪
拾ふ人捨てるひとあり水温む
白梅がたっぷり空っぽの町に

河田町 堀内一郎

山眠る晴天の日の浅間山
紅梅の鮮やかな紅目にしみる
紅梅の蔭より少女いでさうな
帰り花卑弥呼の鏡見付かりぬ
児等の列ポツケ一杯落椿

中井 森山のりこ

野水仙

落合森理和

乾燥しぽろぽろ鏡餅
寒雀飛び立つ浜の松ぼくり
船と猫小さき漁港に日向ぼこ
野水仙水平線に今日の過ぐ
灯消す大き足跡夜半の雪

東大宮 山莊慶子

水仙の一センチ伸び青き空
茜雲七草粥の椀二つ
初春のダンスステップ老夫婦
年経りし山茶花並木空の染む
山茶花の紅に染まりし二人かな

鍋屋横丁
吉弘恭子

初御空瑕なき天へ鴉とぶ
初茜越後の空は鉛色
大旦生傷ひとつつくりしも
初夢やアキレス腱が痙攣す
寒禽と思へばたのし鴉かな

冬籠

清瀬
赤座典子

蹲踞の水浴ぶ対の冬の鳥
うつとりとコロラツラと冬苺
目葉を四種抱へて冬籠る
越後路の鱈の白子が恋しくて
切抜きの映画案内春を待つ

聖蹟桜ヶ丘
安部 里子

おいおいと呼ぶはどなたか去年今年
玄関に丑寅並ぶ去年今年
鉄塔にかんとつんざく初鴉
電線に白鷺群れて新年会
読初の音読するは親鸞よ

梅の風

曳舟遠藤 実

紅梅の昏れ行くころの散髪屋
擦れ違ふ人も上見て枝垂梅
白梅や今昼月と遊びをり
花街の小さな稻荷梅の花
梅一樹鉄の蓋ある路地に咲き

階段を登りきれない初詣
初富士を見しと久しき便りあり
不二の山白にて四方をことほげり
喰ひぶくれ鏡の中の三が日
弓袋たづさへて御慶申すかな



逗
子
鎌倉喜久恵

二月作品より

吉弘恭子

仰向きの大地日を吸ひ雪を吸ひ

佐藤 喜孝

毎日踏みしめている地面に、うつ伏せとか仰向きとか考えたことがなかった。「仰向け」と断定されると何となく納得させられてしまいそうだ。誰もが好き好んで俯せで空の下にはいないだろう。気持ちの良いのは仰向きで空を見ていたい。そう思うと、何と気持ちの良い空間が出来る。その地は何でも吸収してくれる。もしかしたら地球上の争いごとでも吸い取ってくれるかも知れないかなと淡い期待をこの句を読んで思ってしまった。

晴天や今日は夫の布団干す

斉藤 裕子

お天気のいい日には、みんなの布団を干すことが出来ればそれにこしたことはない。しかし都会の真ん中に住んでみると、ビルの蔭になったり隣の家がくつついて建てられたりしていて、色々な

ことが重なってうまい具合にいかない。作者の家は布団を干す空間があるのだろう。しかし家中の布団を干す場所はないのかも知れない。そこで「今日は」と言うことになった。断定したことによって夫に対する愛情がグンと表れた。さぞや当日は心地よい眠りにはいられたことだろう。

冬空の青さを分かつ蜘蛛の糸

篠田 純子

冬空の青さは秋空の青とも違った青々とした感じが好きだ。見上げた空に見惚れているとキラリと光る糸のようなものが目をかすめた。はっきり見るには時間がかかる。太陽の光はいろくくなものを輝かせてくれる。特に木から離れた木へ張った蜘蛛の糸の美しさは格別なものがある。「青さを分かつ」とは言いえて妙である。修飾語を使っていない分鑑賞者にはいろくくな思いを起させて奥深いものを感じる。俳句をはじめ

た頃感情は文字に表さない方がいいとアドバイスされたことが身に沁みている昨今である。

掛時計遅れたままの十二月

芝宮須磨子

数へ日やあれもこれもがそのままに

私の里は商人、今は職人が家業としてすごしている。どうしても十二月になるとせわしく年内の仕事を終わらせてしまおうと頑張る。このように一生懸命になつてしまふという事で家の事はいつの間にか後回しになつてしまふ。遅れている時計を見ながら年末を迎える事になる。新年になつたら新しい心持ちで、遅れた時計もやりのこした事もすつきりと解決している事でしょう。

冬日浴び千駄木の坂猫歩む

須賀 敏子

冬つらら敷下古道三毛走る

東 亜 未

谷中千駄木に吟行した際の句である。お天気

いい日だった。暖かい日だったので猫（野良猫・飼い猫）の漫ろ歩きが目についた。猫好きと犬好きと一般では分れると言われるが、どっちかというと私は猫の方がいい。猫は気まぐれ、人間で言うお天気やと思つている。急坂をゆつたりと歩んでいたり、結構人通りのある道を人様に関係なく脇を走り抜けたりする。かわいい顔で振り向かれるとびつくりしたことなど忘れてつい声をかけてしまう。二句共に作者の感情は五七五の中に表記されていないが、冬うらら・冬日浴ぶの季語の幹旋であたたかい心持ちで居ることがはつきりと読み取れる。生きものつて飼うことが出来る環境にあることが幸せにつながる。今、野良猫が赤ちゃんの時から家に来て寝泊まりしている。前述のように気まぐれなので今の時期、朝帰り・二晩家を空けるが交互になつている。

ほけてゆく吾れを見てゐる寒さかな

堀内 一郎

最近自分でもあきれるほど物忘れがひどい。一階から二階に上がった途端何をとりに来たか、急

に思い出せない。十秒くらい考えてしまう。広辞苑の「ほける」の欄を見ると①知覚がにぶくなる②夢中になる……と二通りの解釈が出ている。①の方の解釈もなりたつが、私は②の解釈の方が面白く鑑賞できた。物事に無我夢中になって居る自分を客観的に見、「寒さかな」と詠嘆で終わったことよって体感している寒さではないと思った。いくつになっても夢中になれるものがあるという事は喜ばしいものだ。今では俳句が私のよこびを増幅させてくれている。

ニューズ聞き地球儀に触る寒夜かな 山莊 慶子

世の中生きている限り色々なことに突き当たる。日本では昨夏戦後続いた政党の交代があった。交代をのぞんだ国民が前政党支持者の数を超えたので、実現したこと。せっかく実現したことなのでしばらくは様子を見ていたい。何だか最近、日本人は性急しすぎるのではないかと思っている。外に目を向けると、あちらこちらで争いが

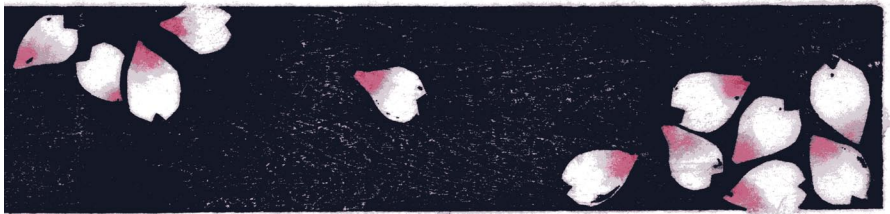
起こっている。日本からみてどこいら辺りになるのか興味がわく。子供の頃父から買って貰った地球儀を一日中ぐるぐる回していたことがふと思い出された。季語の「寒夜」で良いニューズでないことがよく分かる。季語というものが如何に大事か教えてくれた。

のぼり坂下り坂ある大晦日 安部 里子

大晦日ともなると忙しくない人も何となくせわしさを感ずる。坂は、のぼる坂があれば同じ数だけ下る坂がある。特別になんとも思わなく過ごしていたが、俳句に詠まれてみると何となく忙しさを感ずってしまったのは私だけだろうか。見過ごしている日常のことを俳句にすると感動が倍增するような気がした。

人句

古釘をさがしに出づる春の道	佐藤喜孝
すす逃げを独りごちして怠けをり	鎌倉喜久恵
総持寺の黄不動現ず大いてふ	木村茂登子
プレゼント着てくれる子や冬ぬくし	斉藤裕子
冬空の青さを分かつ蜘蛛の糸	篠田純子
冬ばらの白でありしが朱の蕾	芝 尚子
数へ日やあれもこれもがそのままに	芝宮須磨子
しぐれけり西ゆく船も北さすも	定梶じょう
冬日浴び千駄木の坂猫歩む	須賀敏子
切山椒作る店なし酉の市	鈴木多枝子
葉牡丹の葉とも花とも知れぬ憂さ	竹内弘子
楷は葉を垂れ聖堂は冬の雨	田中藤穂



前月作品

冬うらら敷下古道三毛走る	東 亜 未
日の来たり金の冬蝶めぐるし	長崎桂子
芭蕉枯るその枯れ振りのいさぎよさ	早崎泰江
十二月ロボット力士はっけよい	藤野寿子
俳句とは縦に書くもの水温む	堀内一郎
幼児の声透き通る三ケ日	森山のりこ
坪庭に午後の日幽か藪柑子	森 理 和
廃屋に一枚垂れし秋簾	山 莊 慶 子
隼人瓜文殊菩薩のおほき耳	吉弘恭子
駅師走酒売る人の赤き顔	赤座典子
冬至粥坂の途中の我家かな	安部里子
女正月太りし猫の寄り添ひて	遠藤 実

喜孝抄



近世俳諧と漢詩文〜 貳拾九

王岩

よし沢崎之介が改名に

顔みせや曙一刻又千金

存義

図大編『古来庵発句集』前編に見える句である。存義は馬場氏。元禄十六年（一七〇三）
天明二年（一七八二）。別号に李井庵や古来庵などがある。蕪村ら巴人門人との交流も
知られる。門人に花裡雨や抱一や月成などがおり、二世存義は泰里が継いだ。

「よし沢崎之介」は、初代あやめの四男である。兄の二代目が宝暦四年（一七五四）に
死んだので、三代目あやめを襲名した。「顔見世や曙一刻又千金」は蘇東坡の七絶「春夜」
の起句を逆手にとった受容である。

春宵一刻值千金、

春宵 一刻 值 千金

花有清香月有陰。

花に清香有り 月に陰有り

歌管楼台声細細、

歌管 楼台 声 細細

鞦韆院落夜沈沈。

鞦韆 院落 夜 沈沈

蘇東坡は「春宵一刻值千金」と詠んだのに対して、歌舞伎の年中行事の一つである「顔みせ」は早暁から始まるので、「春宵一刻值千金」だけではなく、ここ歌舞伎の新顔ぶれ披露の興行を行う時分は、「曙一刻又千金」と言えよう。

古来庵句集

元日の昼のこゝろや高楊枝
処処漸萌いづる土橋かな
初午やいろはにはほへと花の兄
硝子をさかさ透くや雛の顔
帯びなやこける時にも女夫づれ
蛭の子のめづらしさうに汐干かな
笥の端にもち花さして田うへかな(めぐろにて)
かはほりや行水の湯を空へ打
ぬかぼしは逢夜の星の礫かな

朝がほやほのぼのみゆる人の息
夜夜の風のふくろや薄はら
花火にも裏をみせけり下つふさ(すみだ河にて)
山伏の貝吹行や霧はらひ
いなづまや野は暮がてのわたし舟
先ひとり我影来たり月の友
聞ざるや妻はいはざる冬籠
庖丁に葱のほひや今朝の雪
海ぼらもみなしら壁や雪の暮(愛右山の雪)
堪忍のふくろに年を納めけり
持仏買ふ百性もありとしの暮

あをかき集二〇〇九年度ベスト5

堀内一郎

かはたれ時生身のうちは寒の紅

篠田純子

(三月号)

夕暮れ時、慈なく一日を終えた安堵感で人生に於ける黄昏も感じられる。生身には健康が灯って居り感謝の意も見える。「寒の紅」には厄除縁起もそれとなく、若さに似ず旧きものへの憧れが同居している。「寒の紅」は作者の敵とした姿勢並びに祈りでもあるようだ。

夕鵬に打たるるばかり泥稻負ひ

渡邊友七

(四月号)

農家族の作業の過酷さと、地方の生活を感じさせる。疎開時、見てきた風景が思い出され当時は供出で重要視された農家も現世では農政策も抄々しく無いようである。暁から夕方まで重労働の日暮れ、「泥稻負ひ」はエネルギーの象徴で、けしかける様に励ます様に鵬が鳴き立てる。

マスクから全く白きものこぼる

吉弘恭子

(五月号)

白はマスクからのイメージで「全く白きもの」は本音真実のほとばしりであろう。一枚のマスクで一つ時人間を変えて見せるマジックである。白は作者のあくなき処女性、白地願望かも知れぬ

蜜豆を満たして青き江戸切子

芝 尚子

(七月号)

蜜豆は女性にとって何よりの好物、それも綺麗な器に入れば擦りこの上ない。至福の一時。上五下五旧き時代への傾斜は作書の慎しい姿をも彷彿。中七に生き態への充実感が溢れている。

風薫る少年少女吹奏楽

早崎泰江

(八月号)

この作上五下五のハーモニーが軽快で明るくチームワークも和やかに伝わる。最近、小中学校で和太鼓プラスバンド等盛んに練習している。一昔、私青年学校時代、戸山学校軍楽隊生徒から軍隊ラッパとトランペットを習ったものだ。

初心の頃

と

自選十句

芝 尚子

高島茂さんのボルガへ内藤悦子さんで行って、茂さんが悦子さんの俳句の師である事を知り、茂先生主宰の獐に悦子さんと共に入会しました。

喜孝さんは獐の編集長で何かと茂先生を支えていらっしやったようです。

ボルガの二階の句会に出席した事がなつかしく思ひ出されます。その頃喜孝さんは七の会々と云う集まりを作つてゐて、たまたま私がひとりで伺ふ事になつたとき、中野坂上の地下鉄から地上に出たら、喜孝さんがニコニコと待つて居て下さつたのです。私はびつくりするやら嬉しいやら。あのときの喜孝さんの人間としてのやさしさを、今もつて忘れることはありません。

七の会のメンバーには獐の男性も参加していてボルガでやる句会より高島先生がいらっしやらないだけ云ひたいことをつけつけと云ふ雰囲気、初心者の私は驚くばかりでした。そのよな中で私の句が作つた時と違ふ解釈、だつたので、思はず口を出してしまひ、自分の思ひを云ひましたらある男性から「自句自解するな」と激しく叱られました。それ以後今日に到るまで自句自解はかなり慎んでゐるつもりですが、恭

その昔子の日の松を引くとかや

もうそこにきのふはなくて福寿草

白梅のつぶやき程のかをりかな

小面の目の奥に見る春の闇

春宵や刀自のもてなすおみ御付

まず指の野ばらの棘を抜いてから

いくさ経し人ばかりなり心太

物思ふことより覚めて鯛雲

つやつやと正座してをり富有柿

口に出す寒さ黙ってゐる寒さ

芝 尚子

子さん程徹底出来ておりません。どうしてもひと言云ひたくなったりして。

そしてやがて……茂先生がお亡くなりになつてしまひました。残念でした。

葬儀の折恭子さんの流したたくさんの大粒の泪を私は忘れることが出来ません。

前主宰者が亡くなり、随分ゴタゴタとして喜孝さんも厭な思ひをなさつた事と存じますが、喜孝さんが良くて喜孝さんの元を集まる人達皆で喜孝さんを「かしら」に頂き、新しい結社を造つて下さいとお願ひし御本人もそのお積りで、新しく本の名前その他を考へて下さいました。

そして二〇〇一年一月「あを」と云ふ美しい本が出来上がったのです。そして今年で丁度十年たちました。

会員の皆様お祝ひをしませうね。

初朝の寢息のうすきひととゐる

硯海の面おもにひろぐる初日かな

大旦飛白に包む生一本

元朝や白鳥徳利振ってみせ

日をあびてうぶ毛ひしめく大旦

大旦白麻に印す御觸書

真綿雲月の真上に大旦

初鴉人にかぎらぬ里訛

初鴉夢の片端切りとらる

ひと息もふた息も白初鴉

吉弘恭子

小学校に入つてまもなくの頃、学校返りに貸本屋さんから小説を借りて読み耽るようになった。それからしばらくして将来小説家になることを夢見るようになった。すぐ読み終わつてしまふので一ページ二段組でなるべく小さな字の厚い本を借りたものだ。二年の時無題の作文を書き授業がありその時初めて「鉛筆君と消しゴムさん」という題で書いた。題だけは覚えていたが内容は二人で旅に出掛ける話だつたように記憶している。よく覚えていないが消しゴムさんは最後に鉛筆君に消されたようだった。

その夢もいつ頃からか思い出せないほど頭の中から消え去っていた。

結婚して夫が俳句をやっていることを知る。初めて百草園に散歩に出掛けた時、何かつくつてみたらと言われ五七五と言葉を並べることしか知らなかったのに恥づかしもなく「たんぽぽに道案内され百草園」と生まれて初めて作った俳句のようなものだ。

それから三十七年。二十年前から俳句を作りはじめ、友達のようにだつたり、身体の一部だつたりしている。これからも私の一部分である俳句に誘つてくれたことを今では感謝している。

あを柳集

兼題
返

佐藤喜孝
選

肺嚢をうらがへしたるごとく咳く

思ひ切った表現である。咳は冬の季語、風邪をひいて咳をすることはよく経験する。しかし喘息や百日咳など重い病気に罹ると咳で呼吸困難になるほど恐ろしい。思ひ切ったと書いたが激しく咳き込むときは内臓が喉から飛び出しさうである。大袈裟でも何でもない実感である。

きちきち飛蝗ひっくり返って夜になる

旧友の長谷部朝子さんに

玉蟲のひっくりかへり天守閣

長谷部朝子

他にも

緑龜蟲ひっくり返りうすあかし
亀虫のひっくり返るまでを見し

佐藤 喜孝
森 るか

など虫に興味のある人は多い。恭子さんは数多く俳句を作られる。その作品がある方向を指し示すやうになってきたと思ふ。「声かけて」「返し文」「返信が」など日常の一部をちらりと見せながら、別の世界へ誘ひ込む魅力が出てきつつある。「声かけて」の句はたれかに声を掛けたのかとも思ったが、きつと霜に声にならない声を掛けたのだらう。「引き返す」が今一歩力が足りないかと思つたが、この位で引くのもよいかも知れない。力を入れればいい句になるとも限らないので。「平す」は凸凹の状態から平らにすること、霜といふより霜柱の方がより相応しい。あと一歩は名句と称される俳句を沢山詠むことである。

門をかけて見返る虫の闇

桂 信子

八十八夜みどり嬰家びとに返す

本橋 愛子

牧草にパラソル一つ裏返し

高野 素十

振返る夕木菟顔を變へにけり

佐藤 念腹



返事してなかなか立てぬ置炬燵

長崎 桂子

引き返す勇氣花の咲くは遠し

引き返すことも実力冬登山

木村茂登子

新成人振り返り見よ過疎の故郷さと

ひと気なき藪下古道冴え返る

芝 尚子

月光に返り花透きビイドロに

通し鴨玉虫いろの目を返す

竹内 弘子

古曆裏を返して手習ひす

黒眼ふたつ冬毛あざらし反り返る

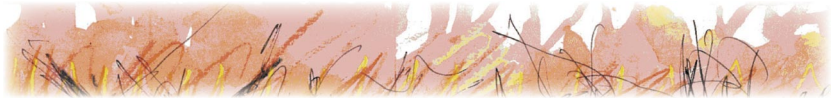
肺嚢をうらがへしたるごとく咳く

後ろから赤んぼのこゑ返り花

久女忌や犬促して歩を返す

返信がたまり春野が近くなる

吉弘 恭子



返答につまる柿の実熟しすぎ

きちきち飛蝗ひっくり返って夜になる

春闌る十返舎一九の振り分け荷

雑踏へ枯野の人と引返へす

引き返す加賀白梅のこのもとへ

返し文口説くなりたる春の雨

日あるうち踵返して臥竜梅

声かけて霜踏み平し引き返す

返却日過ぎてなほ読む小夜時雨

大旦寝惚け眼の返事ハイ

返信に家族の写真福寿草

煮返し鍋に白菜ドカと入れ

寒の月駅へ送りし歩を返す

東 亜 未

田 中 藤 穂



綿虫や返信のなき人のこと

反り返る鯛を押しへ瀬戸火鉢

返り言ピタリと止みし寒の星

振り返る海原抱ふ雪の富士

冬の雲象は體を裏返す

四月馬鹿返書の全てワープロで

梅ヶ香や毎日毎日生き返る

無音になる返照の町冬深む

きのふよりまた若返り雪をんな

森 理和

佐藤 喜孝

あを柳集 投句要項

三月末日〆切 句数自由

〔爪〕

四月末日〆切 句数自由

〔函〕

送付先 東京都中野区中央二の五〇の三

一月の句会

傳

中野区 カフェ傳

遙かより流れ七日の川の音
羽子板やあの頃いくさ始まりし
大旦生傷ひとつつくりしも
正座して膝を苛む寒に入る
鴨の背借りて立ちたし向ふ岸
平らかに暮す勁さや福寿草
寒梅の開かんとして今日もあり
祝箸一人ひとりの名が咲ふ
ちちははの夢見たる朝寒卵
寒波くるすめらみくにのすそ捌き
鶴五角亀の六角初茶の湯
天空へ真つ直ぐな坂初鏡
門出でし腕白呼んで初写真
工場の一つ移りて月冴ゆる
満月にまなこ清めて初日記
双六や行きつ戻りつ東海道
御降や宅配人の上目使ひ
初夢や舅が客を連れてきし
自尊心秘めて素顔の冬木立
寒菊の雪より白い紙の色

敦子 尚子 恭子 弘子 理和 典子 美代子 喜久恵 純子 木枯 東亜未 喜孝 寿子 敏子 綾子 茂登子 裕子 藤穂 実子 文子

あを吟行会

愛宕山神社

春信や舷を這ふ水の光
臘梅や将門の世の水伝ふ
霜柱三角点のありにけり
出世階段上から覗く女正月
愛宕山猫の四五匹冬日向
白梅のぼつりぼつりと愛宕山
草双紙蠟梅に日のまはりきて
大寒やわが存在の皮つまむ
光撒くごとく降りきし寒雀
薄氷の光りて岸を離れけり
それぞれが光に凭れ寒の猫
投函の音の寒さや悔い残る
猫の目のあやしく光る寒き闇
お正月ハイの返事を褒めらるる
寒禽と思へばたのし鴉かな
輪の外で幸せたしかむお正月
野水仙水平線へ今日の過ぐ
病む人の字の美しき賀状かな
横に張る枝の光沢空つ風

喜孝 藤穂 綾子 純子 尚子 敏子 喜孝 木枯 藤穂 多枝子 純子 夏子 尚子 東亜未 恭子 須磨子 理和 房代 綾子

七座句会

中野区・小川苑

連句勉強会 毎月第2日曜
希望者は左記まで
(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会
詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)